

近代的装備で伸びる

# 千倉町のきゅうり

千葉県安房農業改良普及所  
丸山支所

山 崎 龍 男

## はじめに

千倉町は、東京湾をはさんで三浦半島と対する房総半島の最南端、茫洋たる大平洋に臨み、温暖な気候に恵まれ、京浜市場にも近く、非常に野菜作りに恵まれた環境に位置しています。古くから郡内消費地を対象に、野菜作りはさかんでしたが、時代の動きを敏感に感じとった人達8人で、昭和29年に園芸組合をつくり、東京市場出荷にふみ切ったのが始まりで、それ以来一貫して、きゅうり産地化の努力をつづけてきました。

最近では全国第一の規模を誇る共同育苗センター、自動選果包装機をとり入れた集選果場、安値対策として塩蔵加工施設など、生産、販売両面にわたり立派な近代化施設が相次いででき上っている。

これらの施設を産地の中軸とした、新しい態勢で飛躍を目指すこの産地の概要を紹介します。

### ≡ 強固な団結 ≡ 農事組合法人千倉園芸組合

強固な産地になるには、何より組織づくりからです。生産者組織として、昭和41年に従来の任意組合を法人組織とし、がっちり生産体制を固め、販売面は農協にまかせて、生産者は生産一本に打ち込める体制をとっています。

普及所で最近まとめた産地調査をみますと、次のとおりです。

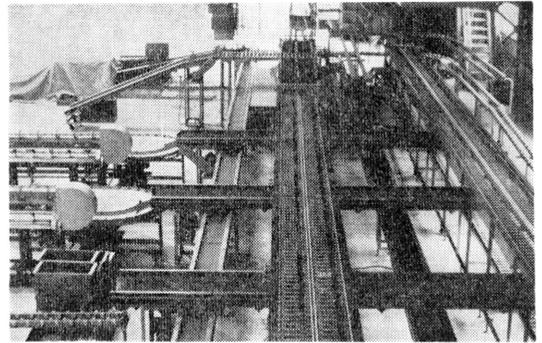
ハウス農家数 64戸

・ 面積 106,700㎡(1戸当り1,590㎡)

経営主の平均年齢 45才 家族労働力 2.6人

### (第1表) 千倉そさい園芸組合の施設概要

事業内容	施設名	共同育苗センター	塩蔵加工施設	直営ハウス	集選果場
とり上げた事業名	野菜近代化事業	農業構造改善事業	野菜近代化事業	農業構造改善事業	
実施年度	昭和41~43年度	昭和44年度	昭和44年度	昭和43年度	
事業費	39,011千円	28,647千円	10,518千円	34,072千円	
規模	10,000㎡	927㎡	6,600㎡	910㎡(建坪)	
能力	育苗可能本数 30万本	処理能力 1,000t	年2回作	時間当り処理能力 3t	



巨大な集・選果場の内部

経営耕地面積 水田38アール 畑48アール

(殆んど露地やさい)

また園芸組合で運営する近代化施設と、集選果場〔事業主体は千倉農協〕の概要は第1表のとおりです。

以上の基盤にたって今後の方向を考えてみると、第一にこれらの施設の規模は、将来の産地発展を予測してつくられています。直営ハウスのほかは、すべて広い敷地内に一カ所にまとめられ、見るものをして目を見張らせるに十分なものですが、一方、生産農家をみた場合、ハウス農家数も意外に少なく、一戸当りの規模にもかなり差があり、1,000㎡以下の小規模農家もかなり多い。

規模拡大とハウス農家の増加によって、施設を駆使することが当面の課題とされます。

### 栽培のあらまし

作型、品種 春作、秋作の年2作のハウス利用になっています。かって43年から44年にかけて、暖地の利点をいかして、厳寒時の1~3月の高値

### (第2表) 作 型

項目	品 種	播 種	定 植	収 かく	目標収量 (3.3㎡)
春 作	久留米落合H型	9月10日	10月10日	11月中旬~ 2月上旬	15 kg
秋 作	ときわひかり3号	1月15日	2月20日	3月下旬~ 7月下旬	35 kg

時を中心に11月中旬から6月まで出荷する、越冬長期採り年一作型も試みられましたが、かなり無理な面があって、予期した程の収益が上らず、危険分散をも考慮して現在第2表のような作型です。

育苗 育苗は前述の育苗セン

ターで、燻炭利用の水耕育苗方式で健苗を育成し組合員に配布します。育苗管理の作業は、役員の責任管理のもとに、生産者と切りはなして、専属に雇用された作業員があたりますが、種まきや接木作業のように、一時に多くの労力を必要とする作業には、苗の注文本数に応じて出役が義務づけられ、適期作業が行なわれる仕組みになっています。

このようにして生産された苗代金は、育苗に要した直接経費（種子、肥料、農薬、燃料、人件費等）と、施設の償却費（苗跡は栽培に利用されるので、育苗に要した期間計算）の合計額を、育苗本数で割り出して算出します。

最近の例では秋作苗は17円、春作苗は暖房費が加わって22円で配付されています。

**定植と施肥** 苗の配付予定日を基準に、組合員は、それぞれハウス内の定植準備をすすめます。

きゅうりはご承知のように、連作地でもつる割れ病は接木で回避できますが、残る問題はネマトーダの害と土壌の濃度障害です。

ネマトーダは春作終了後、必ず殺線虫剤の灌注をして被害を防ぎます。濃度障害については前作終了後、普及所で電導度計で測定し、その結果をもとに施肥量の加減や、場合によって除塩処置を講ずるなど対策をたてます。

肥料は42年までは、油粕を主体にした施肥設計にもとづいて、農協で配合したものを使っていましたが、施肥後、定植までにかかなりの日数（20日以上）をおかねばならず、そのうえ肥料代が高つくこと、また当時油粕の入手難から、これに代る肥料の要望が強まり、組合研究部で行った試験展示の成績等をもとに、この年からCDUの施用に踏みきりました。幸い結果は非常に良く、以来連続してこれを使っています。

参考までに施肥設計を第3表に示します。

(第3表) 施肥設計 330m<sup>2</sup> (100坪) 当り

肥料名	全量	備 考	配合肥料の割合(1袋40kg入り当り)		
			硫 安	7 kg	成 分
堆 肥	1,000kg	全量元肥とし生育後半状態により液肥を施用する	CDU単体	9	N. 10.65%
CDU配合	200		過 石	9	
苦土石灰	60		重 焼 燐	7	P. 9.80
ハイグリン	20		硫 加	8	
成分量	N. 21.3kg P. 19.6kg K. 19.2				K. 9.60

打ち切り（2月10日）から、春作苗の定植（2月20日）まで僅か10日間の日数しかなく、その間に表のように、全量元肥を主体に全層施肥して何ら障害もなく、長期間肥効が持続することです。

定植の際、育苗センターからの苗運搬では、寒風に当てないようビニールや、こもをかけるようにし、植付直後は、燻炭苗は株元が乾燥しがちですので、灌水は株元を重点にするなど細かい注意をはらっています。

栽植本数は3.3平方メートル当たり3.5本～4本、2子づる仕立て、つる数は7～8本です。

**定植後の管理** 摘心、整枝、温度管理、病虫害防除等、組合の栽培指針に従い入念な管理によって、目標収量の達成につとめます。

特にこの産地は、数年前から菌核病の多発が大きな生産障害になっていましたが、44年秋作からスクレックスの散布効果が確認され、この悩みはかなり解消されました。

**規模拡大に結びつく集・選果場**

選果場完成までは、農家が等級毎に選別区分するので、毎日夜なべ作業になり大きな負担でしたが、現在では収かくしたものをそのまま搬入すれば、機械選果されるので、大きな労力軽減になり、安心して規模拡大ができるようになりました。

搬入後は一切、農協で責任をもって当ります。

能率良く選果され3本ずつポリ袋に密封包装（シュリンク包装）されて、ダンボール箱（主に10kg詰）に詰めて出荷され、毎日等級毎に売上代金はプール計算され、系統を通じて農協個人口座に振込まれるシステムになっています。

**安値時は加工で勝負**

生鮮食品の悲しさ、需要とのバランスがくずれれば値下りは必定です。こんな時の用意に、この産地は加工施設をもっています。

市場出荷して採算割れとなれば、管理に手の届かなくなるのは人情です。やがて値を持ち直したときには、ハウス内のきゅうりが「ガラガラ」では間に合いません。安値になれば加工向けとし、それが毎日数千円から、規模の大きい農家では万円単位になるということであれば、そんな時でも管理に張合ができるというものです。

何より良い点は、現在の作型では秋作の収かく